

インターローカルに 舵をとれ

映画監督 **林 弘樹**
(ものがたり法人 FireWorks)



僕が沖縄について書くということなどないと思っていた。それが今では右手にメガホン、左手に三線を持つ「うちなーむーく監督」と呼ばれたりする事になるのだから、ご縁というものは有難くも恐ろしいものである。出会い以上に劇的な変化を引き起こすことはないと言っている。東日本大震災があり、東京は自粛ムードを通り越え、萎縮ムードが蔓延していた2011年、僕は初めて沖縄にやって来た。どこに連れて来られたのかといえば、イメージしていた南の島の楽園ではなく、沖縄総合事務局なのだった。詳しい事情は割愛しよう。(興味がある方には、島ぐわー呑みながら語りますから連絡下さい)

一つ言えば、僕はこの15年近く、日本中を巡り(沖縄以外)、出会った一人一人と関わり、多くの人を巻き込みながら映画づくりを行ってきた。関わってもらった人数は数十万人にも及ぶ。映画づくりと云うとロケ(撮影)を思い浮かべるかもしれないが、僕らの映画づくりの本質は、地域の根っこを掘り下げていくことだと考えている。人の暮らしや想い、先祖から脈々と受け継がれてきた祭りや伝統、そして歴史。そういうものがあつたという知識レベルではなく、もっと深いメタレベルでの意識の物語の掘り起こしが必要だ。一旦ほどこいて結び直す、それが過去から未来へと紡ぐ物語の原理だからだ。

さて、日本。戦前の富国強兵という文脈を終え、ひた走りに高度経済成長という物語を突き進んできた。

その80年に亘る勇ましいストーリーも、2013年から幕引きの最後の20年

間に入ったと云われている。10年以上も前から時代の変化については語られてきたが、実感値としては低かったように思える。それが一気に目に見えるカタチで現れてきた今、果たして僕らはどこに向かつていくのだろうか。常識が非常識に転じる時代。暮らさし方、働き方、安全保障に社会保障という内外のフレーム自体も正解がない時代に突入した。そんな時、各地の現場で熱く地域づくりに燃えている仲間たちは心の底で何を感じているのだろうかと考えた。それを体感したくて、映画「ふるさとがえり」上映会を全国で愚直にやり続けてきた。気づけば日本中で1300カ所、県内でも2011年に沖縄総合事務局が繋いでくれた上映会をきっかけに50カ所以上に拡がった。そこで参加者たちと対話してきたことは人と人、地域と地域の関係性に他ならなかった様に思う。

そこで紹介したいのが表題の「インターローカル」というキーワードである。インターローカルとは、国境とは関係のない地域間の関係性だったり、近隣の地域との関係性を意味する。共通するのは関係性、つまり「間(ま)」にある。間とは、関係性の真ん中にある目に見えない大切な部分。どちらかという効率性の対極にある非合理の積上げから生まれる世界。(間がない状態を間抜けともいう)その「間を問う」ことを主題とした映画「慫」が今年完成したのも時代の所以かもしれない。

僕は今こそ、沖縄は「インターローカルに舵を切る」時なのかもしれないと思う。グローバルとかインターナショナル

という20世紀的な文脈でしか、外と向き合えない地域ならそれは難しいのかもしれない。でも、沖縄なら可能だろう。そもそも数百年前からインターローカル的な世界観が脈々と育まれてきた島々だったのだから。今や日本中で「沖縄は一つ」みたいなイメージで、地域の絆が他より深い様に語られることも多い。先祖の縦糸から繋がる家族や親戚、地縁の繋がりを、大きな家族の様に大切にしている風習が沢山ある。僕が沖縄が好きなの理由もそこだ。(誰でも年上の人をいにい、ねえねえと呼んで関われる所とか素敵です)

しかし、今の沖縄のままで走ってけば、それは今後難しくなるかもしれない。とにかくスピードが速くなり、忙しさは増している。今まで手間をかけていたことをお金で対処することも増えた。地域の絆が強いからなのか、「地域間の関係性」においては、沖縄は特に溝が深い。嘗ての沖縄や琉球について語られても、今とは物語として繋がっていきにくく、遠いお伽話の様にさえ聞こえているのが現実だ。

たぶんこれからの選択次第なのだろう。その為は今から出来ることを僕も一緒に関わりたいと思う。具体的な何かより、まず誰とやるか。もつと言えば誰と生きるか、何を愛するか。それを丁寧に語ることが出来る場づくりをしていこう。手間と時間をかけ、熱量を注ぎ込めるような物語を共に創造していきたい。それが沖縄と日本、そして世界へ向けて真のラブ&ピースを発信することだと思おうから。そして僕を家族として迎えてくれた沖縄への恩返しだと思おうから…。